

リターンの源泉を探せ

株式のリスクプレミアムについて大論争があった米国の企業年金でも、今後 10 年程度のリターンは 6% ~ 8% と、12% ~ 15% といった、これまでの強気の見通しからは一段下がった水準に落ち着きつつあるようである。しかし、株式の期待リターンが下がったといっても、年金の運用を止めるわけにはいかない。

むしろ、新たなリターンの源泉を探しに挑戦しようというのが現状である。その一つが、資産クラスの多様化である。エマージング市場、プライベート・エクイティ、不動産、ヘッジ・ファンドといったオルタナティブ投資（代替投資）への関心は高い。もう一つは、銘柄選択や投資タイミングについてのマネージャー・スキルにより、プラスアルファを得ようという動きである。

もちろん、これらの投資には新たなリスクを伴う。とはいえ、従来の資産配分中心の運用により管理されていたベータ・リスクとは、異なるリスクである以上、分散することもできるという。

経済成長率のコンセンサス予想からみて、長期的に株式からのリターンに多くを期待できないのは、わが国も同じである。年金基金の維持・発展のためには、リスクをコントロールしつつ、新たなリターンの源泉を探る試みが欠かせないのではないか。

《目次》

- ・ (年金運用) : 変質する英米の確定給付年金 (上)
- ・ (公的年金) : 基礎から理解する年金改革 (4) 出生率低下の影響と残された課題
- ・ (年金運用) : キャッシュ・バランス・プランの疑問 (5)

~ “10年国債利回りの5年移動平均” に対応する運用戦略は？